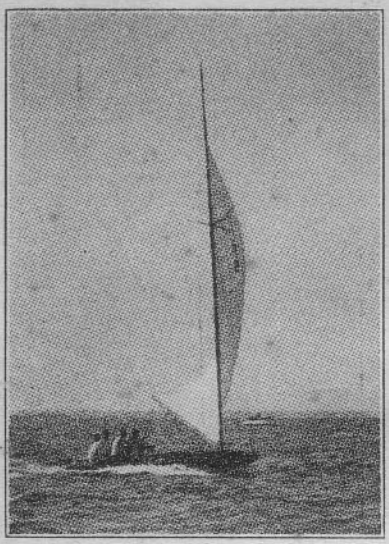

日本ヨット倶樂部

趣意書

規約

事業

趣意書

ジャズに盛られた狂燥變異は近代相を表徴すると謂はれるが其れに依つて釀された感官的なものはエロとグロとに發散せられざるを得ない　然しソーダ水の泡立ちは只泡立に過ぎない。体力の上から、經濟の上から、更らには心的要求は、其等のものゝ中に總明理智の暗示する何者もない点で、もつと力强い、清新な、明るいものを求める

吾等は戸外スポーツを離れてリズミカルな生活は在り得ないと確信する

身体の爲めになるからと云ふ感念論的なものでなく、要求としてのスポーツ的興味の方が現實性が多い。夫れ以上に自然の恩寵に浴し自然美を感得するなら、更らには美しい友情の展開と讀書があるなら清新な世界は自から我等の前に展らけゆくであろう。

我等は此点に於て海洋美を選んだ。

泳ぎを會得して、其次に、ヨリ自由への憧れは船を求める

漕艇、ヨット、パワボート、は其の後に來るものであらねばならない。然るに實生活が漕

艇に於ける統制あるトレーニングの餘裕を與へない点で、ヨリ大衆的なものを提示するとせば我等はヨットと自動艇こそ山嶽に於けるスキーの驚異を齎らすものなることを信ずる過去十數年琵琶湖を根據として日本ヨットの國際的進出を目標に拮据して來たのであるが遂に社交とスポーツを併せた倶樂部の創設となつたのである。かくて一面には少しでも我等の日常生活を豊富にし他面我國ヨットの隆興と併せて琵琶湖の近代化の一助ともなるなれば倶樂部創設の望みは足る。

希くば吾等の企てに絶大の支持あらんことを。

日本ヨット倶樂部規約

一、本倶樂部ヲ日本ヨット倶樂部ト稱シ當分ノ内事務所ヲ大津市中保町上田健治郎氏方ニ置ク

二、本倶樂部ハヨット並ニ自動艇ニ關スル技術ノ普及ト會員相互ノ信交ヲ圖ル爲メ之ニ必要ナル諸施設ヲナシ競技會ヲ開催シテ將來國際的ニ進出スル意圖ヲ有ス。

三、本倶樂部ノ經費ハ入會金、會費、寄附金、ヲ以テ之ニ充ツ

四、本倶樂部ニ會長一名、副會長一名、委員若干名、幹事十名以内ヲ置ク　任期ハ各一ヶ年トス

會長ハ委員會ニ於テ推薦シ倶樂部ヲ代表ス副會長ハ委員會ニ於テ推薦シ會長ヲ代理ス

委員ハ總會ニ於テ選出シ委員會ヲ組織シテ諸般ノ事項ヲ決定ス但シ規約並ニ細則ノ制定改廢、名譽役員會長ノ推薦、諸計畫豫算ノ決定、諸施設、決算ノ査定ニ關シテハ特ニ總會ノ承認ヲ求ム可シ、委員會ハ會長之ヲ召集シ委員ノ過半數ノ出席ヲ以テ成立ス其決議ハ出席者ノ三分ノ二以上ニ依ル

委員會ハ左ノ名譽役員ヲ推薦スルコトヲ得

名譽會長　顧問　名譽會員

幹事ハ委員會ニ於テ選出シ常務會計ヲ司ル

（當分ノ内創立委員ニ於テ事務ヲ遂行スルモ妨ナシ）

五、總會ハ年一回以上會長之ヲ召集シ其議決ハ出席者ノ三分ノ二以上ニ依ル

附則　本規約ノ實施ニ付キテハ細則ヲ設クルコトヲ得。

事業

一、ヨット、自動艇教本の編輯

海洋雜誌特に船に關するスポーツ畫報雜誌の編輯

二、各地方に於けるヨット自動艇倶樂部の設立促進

全日本ヨット聯盟の創設と日本ヨット選手權確立促進

三、ヨット、自動艇の設計研究

四、航海術研究修練

五、艇庫及クラブハウスの建設

六、ヨット、自動艇の建造

七、ヨット、自動艇レースの開催

八、ヨットキャンピング、週航

九、英米諸國ヨット倶樂部との通信

十、一九四〇年日本に於ける萬國オリンピック出場準備

事業概設

一、ヨット、自動艇教本の編輯

此競技は畫報で知つて居る位で、どんなものかどうしたら、これに近づけるかを大衆に知らさればならない

二、各地方に於けるヨット自動艇倶樂部の設立促進

全日本ヨット聯盟又は協會の創設と日本選手權の確立促進

前述の如く日本にヨット自動艇が未だ幼稚だからこのスポーツの團体を各地に作り將來は日本漕艇協會の如く全日本ヨット自動艇の選手權確立に迄到着したい。

三、ヨット自動艇の設計研究

このスポーツの指導的立場に立つものは艇の設計造艇にあるから過去十年來の研究を今後も續ける。

四、航行術研究修練

琵琶湖を本據としても將來は瀬戸内海、沿海更には近海迄出懸けたいので其準備として神戸あたりから講師を時々招きたい。書籍、海圖、器具も段々設備する、初めは休番の大湖汽船の二等運轉士の方にでも教はりたい

琵琶湖航行修練者には倶樂部所定のパイロット章を授與する

和船の船頭も招きたいと思つてゐる。

以上は特に希望せられる方、日本選手權を目指す人のための事業で普通の方には必要がない

五、クラブ ハウス建設

土曜、日曜を愉快に過ごす爲めクラブハウスを建設し特に土曜の夜は友交を圖る爲めに娯樂設備、簡易な宿泊設備をする

六、ヨット自動艇の建造

初めは取扱易い十六尺副員六尺定員四、五名の艇二隻。石油發動機船四馬力一隻としたい昭和六年二月前者二隻は註文をした。後には會員の數に應じて深吃水艇や三、四十哩の出る自動艇を造る。

七、ヨット、自動艇レースの開催

倶樂部員のレースと併而一般の優勝レース中等學校のレースもやる

白い、大きい帆の艇が走るのだから石場のボートレースの樣に見えない心配はない。

八、ヨットキャンピング

琵琶湖には内湖になつた、碇泊に好ましい所があるから夏キャンプに出懸ける。勿論蚊を防ぐ設備もする。野外大地に寢るのと違つて艇に全部乘せて行つて艇内に帆具でテントを張るのだから同日の談でない。

雄松や竹生島の奥にヨット小屋を移動式に設備するのも面白い。

九、英米諸國ヨット倶樂部との通信

スポーツによる親善を圖る外、我國のヨット自動艇界併而其風光も紹介し、一般設備組成、艇の設計其他參考にする。倶樂部員で一九二三年から外國雜誌を購讀してゐる方もありこれを引續きやつてゆく。

十、一九四〇年日本に於ける萬國オリンピック出場準備

其際ヨットも外國から持つてくるなら國産ヨットで海の國に恥じない丈の準備をする
全日本ヨット聯盟の組成と關連するがオープンでもよいから出場する。
日本は今迄ヨットレースには出てゐない。
海國民の恥である。

海の王者たれ！

自由と靜寂を求めて海の彼方へ！
とは彼モオンバッサンをして翼ある家、快艇ベラミーを南國の豊かな大潮の上に走らせた言葉であつた。
明け方の淡い星光を受けて、未だ眠りより醒めやらぬ波止場を離れゆく快艇ベラミー。
大帆は自然の吐呼吸に微かに慄ふ。空は底知れぬ胸を朝靄の中にほの見せて、渺茫たる大洋は舳にザッザッと碎くる抱擁のサインを忍やかに示して展ごる。
東天の紫色は紅を染めて來た。港口の浮標よ！ さようなら！ 港の夢よ！ 灯よ！ さようなら！

フレッシュ ブリーズだ！
ベラミーは慄ひ、底力ある震ひをつたへる。
躍る樣に、狂ふ樣に、
彼女は南の海を駛り走る、
西に 南に！
東に 北に！
徑なき森に愉樂あり
淋しき汀に歡喜あり
深き海に、入るを許さぬ世界あり
我、人をいとふにあらず
されど自然を愛す
更に 更に
おゝ 汝 自然の委よ！
我が本性と過去とより